



ゼットイわかる病理写真の読み方

生検組織診断、細胞診断に代表される「病理診断」は、放射線診断などの画像診断と並んで、疾病の診断にとってきわめて重要な位置を占めている。と同時に、病理診断は数ある医療行為の中でも、もっとも専門性の高いものであるとすることができる。放射線診断が最低限できないと臨床医が務まらないのに対して、病理診断となるとちんぷんかんぷんという臨床家が少なくない現状にその「ところ」が集約されている。病理診断を本当に理解できるようになるには、病理診断に関するトレーニングを数年以上受けることが必要である。つまり、医師国家試験における病理画像の出題はたいへん難しい分野に属すといっても過言ではなからう。

本音は、血液や腎臓の基本を除けば、病理画像の出題は無用であると言いたいところだ。現に国家試験に腫瘍や細胞診の画像がかなりの数出題されている現実や、もっぱら病理画像が判断の基準とならざるを得ないような出題がなされることを考えると、学生諸君に心から同情の意を表したい。病理画像はそんなに簡単じゃない、がその理由。病理診断が現代の臨床医学になくってはならないものであることを否定するつもりは、むしろ、毛頭ない。しかし、文句ばかり言うてはいられないので、本書では、代表的な病理画像の提示とその解説を提示した。肉眼所見、細胞診と感染症を多く取り入れたことをあらかじめお断りしておきたい。「疾患の概念」をつけ加え、学生諸君の疾病理解の手助け、復習材料となることをめざした。

へえ、病理ってなかなか面白いじゃない、なんて言ってくれる学生さんがひとりでも増えて、わが国における慢性的病理医不足に一刻も早く終止符が打たれることを切望したい。

(著者：堤 寛、全 259 ページ、¥5,600、税別、医学教育出版社、東京、2001年5月第1版第2刷)

